

代表者 3A 廣嶋 宙
指導者 菅原 真紀子

はじめに

これまで、かづの学では、さまざまな分野の視点から鹿角地域に関わる研究・調査がおこなわれてきた。しかし、それぞれの研究は1年で終了していることが多く、生徒自身が継続して研究・調査したいと考えても、それを行うことができなかった。本講座は、自ら進んで調査活動を行いたい生徒が、それぞれの設定したテーマについて自由に研究・調査を深めていくことができるよう設定した、多分に実験的な講座である。講座自体が実験的であるので、生徒の研究・調査について述べるほか、本講座の存在意義も検証していきたい。

I テーマ設定の理由

本講座は、これまでのかづの学を踏まえ、生徒自身がテーマを設定し、より踏み込んだ研究・調査を行っていくことが目的である。以下のテーマは、講座開始時に生徒が設定したものである。

- ① 鹿角市花輪商店街の変遷（3A 廣嶋 宙）
鹿角市内最大であろう、花輪のおおまち商店街の変遷を調査することで、活性化に繋がるヒントがあるのではないかと考えた。
- ② 十和田湖周辺の食べ歩きマップ制作（3A 赤坂悠名・小館未来・高杉佑子）
秋田県と青森県の共有財産であり、本校の強歩大会のスタート地点でもある十和田湖を、観光地として活性化したいと考えた。
- ③ 鹿角地区をより魅力的にするには？（2C 小坂橋穂乃花・奈良七海）
どのようにすれば鹿角が活性化していくのか、地元の中学、高校生がどのように考えているのかを知りたいと考えた。また、どのような施設や催しがあれば鹿角に人が集まるのか、意見を聞いてみたいと考えた。
- ④ 鹿角地域の河川にすむ魚類とその商業的利用（2B 安保 甫・兎澤珠利）
鹿角地域に流れる河川の水質と、そこに生息する魚類を調べ、商業的にどのような利用価値があるかを考えていきたい。
- ⑤ 鹿角の防災（2A 石川大人 2C 美濃山敦貴）
学校周辺の地域の防災についてより詳しく調査したい。

このうち、④、⑤については研究プランを立てている段階で実施困難であることが生徒から申し入れられたため、該当生徒は③のチームに加わることとなった。

II 実施計画

- 1 オリエンテーション
- 2 調査・研究のプランを立てる
- 3 調査・研究活動
- 4 発表準備
- 5 発表

III 調査・研究内容

生徒の発表要旨を以下に掲載する。

- ① 鹿角市花輪商店街の変遷（3A 廣嶋 宙）
おおまち商店街の歴史および近隣店舗の変遷について調査を実施した。昔の町並みについては、鹿角市図書館から商店街史を借りたり、実際の店舗に取材にいったり調査を行い、地図で表した。



- ② 十和田湖周辺の食べ歩きマップ制作（3A 赤坂悠名・小館未来・高杉佑子）
十和田湖を訪れ、十和田湖周辺で実際に名物を調査し、女子高生の視点から手作り風の食べ歩きマップを制作した。ヒメマスや十和田バラ焼きなど、実際に食べたり、店舗の方に話を聞いたりできた。



③ 鹿角地区をより魅力的にするには？

(2 C 小坂橋穂乃花・奈良七海・美濃山敦貴
2 B 安保 甫・兎澤珠利 2 A 石川大人)

花輪第一中学校、十和田中学校、花輪高校、十和田高校の4校でアンケート調査を行い、中学・高校生が鹿角についてどう考えているか調査、分析した。



IV おわりに

(生徒から)

① 鹿角市花輪商店街の変遷 (3 A 廣嶋 宙)

調査をしていく課程で、かつて十和田高校が商店街でかき氷屋を出店していたことがわかった。文化部の活動を広げ、もう一度商店街で十和田高校が何らかの活動ができないか、検討できないだろうか。

② 十和田湖周辺の食べ歩きマップ制作

(3 A 赤坂悠名・小館未来・高杉佑子)

年齢を問わず、家族連れや高齢者、外国人観光客などさまざまな人が十和田湖周辺を観光していた。皆さんも是非訪れてほしい。

③ 鹿角地区をより魅力的にするには？

(2 C 小坂橋穂乃花・奈良七海・美濃山敦貴 2 B 安保 甫・兎澤珠利 2 A 石川大人)

鹿角の地域活性化には、自然を活かし、子ども

もが集まることのできるテーマパークがあるといいのではないかと結論に達した。また、今回の調査では鹿角を嫌いという回答の人が半分もいて、さまざまな不満から県外へ行く人がおおいと推測された。

アンケートにご協力いただいた皆さん、どうもありがとうございました。

(指導者から)

この講座では、生徒が自らテーマを設定し、調査、研究を進めてきた。プランを立てる段階を重視し、昨年度までの調査、研究からより発展したのものにするため、さまざまなアイデアを考え、活動してきたが、残念ながら実行が困難なテーマもあった。

発表まで継続できたテーマについては、発案者がしっかりと意欲をもって、自ら進んで取り組んだことが共通点としてあげられる。それぞれ、夏休みや放課後、休日を利用して校外での取材やアンケート依頼、文献調査などを行い、それを元に発表準備を進めることができた。また、昨年度までの調査、研究の経験を活かし、発表の仕方なども自ら発案することが容易だった。

実行できなかったテーマについては、以前の調査の影響が大きく、昨年度の踏襲になりがちで、そこからの発展が見込みにくかったこと、専門分野の教諭の助力が、かづの学の時間内では難しかったこと、放課後などの自主的な調査・研究活動ができなかったことなどが要因にあげられる。

今年度のかづの学では、1年生が調査、研究の手法について学習しているため、来年度以降の2年生、3年生は、自らテーマを設定し、自ら調査、研究を行うことが可能ではないだろうか。しかし、生徒が設定したテーマで調査、研究を行う場合、指導者側の体制も整っていないと実現が困難であると考えられる。それには、現在のかづの学の実施の仕方では対応が難しいと推測される。今回、自らテーマを考えながらも発表まで至ることができなかった生徒には申し訳ない結果になってしまったが、今後のかづの学の進め方を考える上では有意義な講座であった。